

文法と神——一般文法と言語神授説

糟 谷 啓 介

1 チョムスキーとポーセ

生成文法の創始者チョムスキーが一九六六年に著した『デカルト派言語学』は、生成文法が西欧思想の合理主義哲学の伝統に根ざした理論であることを主張したことによって、言語学の枠をこえて、多くのひとびとに驚きをもってむかえられた。とはいえ、デカルトとポール・ロワイヤル文法を中心にして、ヘルダー、シュレーゲル、フンボルトといった、ふつうなら合理主義の潮流とは無縁とみなされる思想家もひとまとめにして論じるチョムスキーのやりかたには、かなり杜撰なところがあるのはたしかである。

たとえばアースレフは、「デカルト派言語学」など存

在したためしはなく、テクストの理解から思想的バースペクティヴにいたるまで、チョムスキーの本は誤りだらけであるとはげしく批判している (Arsjleff: 101-119)。

けれども、わたしは『デカルト派言語学』の欠陥を思想的観点からあれこれあげつらう気にはなれない。たしかにその本は「合理主義思想の歴史の一章」という副題が付されてはいるけれども、出来事の意味は特定の時間と空間のなかで決定されるという「歴史意識」が、チョムスキーにあるかどうか疑問なのである。その点で、チョムスキーは「そもそも歴史だの思想史などというものを否定しようとしている」(田中: 252) という指摘は、チョムスキーの議論の本質をついている。

だから、チョムスキーが書いたのはほんとうの意味での言語思想史ではなく、生成文法の学問的正統性を主張するための宣伝文書であると考えたほうが、その本の意図を正確に理解できるだろう。むしろ、期せずしてイデオロギー的な側面をもふくめて、生成文法の系譜学を描いてくれたことに感謝すべきかもしれない。生成文法は大いなる一般文法の伝統への先祖帰りという側面があるのは、まぎれもない事実なのである。

ただし、一般文法の伝統に生成文法を結びつけようとするチョムスキーの姿勢には、故意かどうかはさておき、大きな言い落としが見られる。それは、一八世紀に一般文法を構想した者のほとんどが、デカルトではなくロッキの経験論を理論的前提としていたということである。その点で、『デカルト派言語学』だけではなく、ほかのチョムスキーのどの本にもコンディヤックの名前が登場しないのは象徴的である。コンディヤックが一切の合理的的前提を排して感覚論的立場に立ちながらも一般文法を構想したことは、チョムスキーの観点から見ると、あってはならないことなのだろう。

一八世紀の一般文法において、言語は思考の写しであ

り、思考を構成する諸観念のあいだの関係は、あらゆる言語、あらゆる人間において同一であるという認識は、哲学的基礎を合理論にもとめようとする経験論にもとめようと、ひとしく認められた公準であった。この把握こそが、一般文法という理論装置を可能にしたのである。そして、諸観念の関係が、観念連合にもとづく並列的な関係(コンディヤック)であるか、観念相互のつくる階層的な順序関係(デュマルセ、ボーゼ)であるかが一般文法の方性を決定した。しかし、デュマルセはコンディヤックに対立しながらも、おなじくロッキの経験論を信奉していたのであり、やはり合理論対経験論という対立は二次的なのである。

一八世紀に一般文法を構想した者のうち、はっきりと合理論的基礎にたつことを宣言したのは、おそらくボーゼただひとりであろう。そして、そのことをチョムスキーはよく知っているようだ。なぜなら、一般文法はあらゆる個別言語に先立つ「普遍的一般的な原理」を対象とする「演繹的科学」であるという、チョムスキーの理論にとって要となる主張は、かならずボーゼの著作からの引用で補強されるからである(Chomsky 1986: i: id.

1989:1)。おそらく、生成文法にもっとも親和力をもつのは、ポール・ロワイヤル文法でも、フンボルトでもなく、ポーゼの一般文法理論なのではなからうか。

2 デュマルセとポーゼ

当初『百科全書』の言語関係の項目の執筆を担当していたのは、デュマルセであった。しかし、第七巻に掲載された「文法家 (Grammairien)」を最後にして、デュマルセは一七五六年に世を去った。(ちなみに、この第七巻にはダランベールの筆による追悼文「デュマルセ賛」が掲載されている。) それ以降は複数の人間が後を引き継いだ。そのなかで「倒置法 (Inversion)」言語 (Langue)「教育法 (Méthode)」命題 (Proposition)「慣用 (Usage)」などの重要項目を担当したのが、当時王立兵学校で文法を教えていたポーゼである。執筆者名は“B. E. R. M.”となっているが、これは *Beauczée Ecole Royale Militaire* の略である。(執筆者問題に関して *Auroux 1973: 49-50* を見よ。) として、一七六七年になると、ポーゼは彼の理論の集大成として『一般文法 (Grammaire générale)』を刊行した。

ポーゼは、一般文法の理論の方向性においては、デュマルセとはほとんど同じ立場をとっていた。だからこそ、『百科全書』の項目の引き継ぎという重要な任務が、ポーゼにあてがわれたのであろう。

けれども、デュマルセとポーゼとのあいだには、見のがすことのできないちがいはある。そのちがいは、理論の核心にかかわるというよりは、その周辺部で起こる比較的ささやかな性質のものであるのだが、ロックの経験論に忠実であったデュマルセと、合理論にもとづくポーゼとのちがいが明瞭にあらわれたものとして、見のがすことはできない。

(1) 文法と比喩の起源

第一は、文法の起源と比喩の起源に関するものである。デュマルセは、〈主語—動詞—目的語〉からなる「単純構文 (construction simple)」は理性による思考の分析にもとづき、それはあらゆる言語における命題の了解にとつて第一の基礎であると考えたが、実際に言語が歴史的に形成されるときに、この単純構文が基礎となったとは見ていなかった。デュマルセによれば、言語が発生する際には「一種の本能と感情の形而上学」(Du Mar-

sais t. 3: 38) が支配していたのであり、その後には文法家が言語を観察することによってはじめて文法的規則が成立したのである。つまり、デュマルセにとって、歴史と理性は一致せず、「起源」の意味は両義的なままにとどまっていた。

歴史と理性を一致させる方法はふたつあった。ひとつは、理性の成立そのものを歴史的な発生論のもととらえる立場であり、コンディヤックのアプローチがこれにあたる。もうひとつは、理性は歴史に対して超越的な立場にあり、理性は歴史の起源においてすでに顕現しているとする立場である。じつは、これがボーゼの一般文法の基礎にある考えかたであった。

デイドロは『聾啞者書簡』において、コンディヤックの理論にしたがいながら、フランス語は倒置法という「始源の時代の片言の残存」を最ももたない理性的秩序をもつ言語であるとのべた(Diderot: 546)。ボーゼも、フランス語が「分析秩序」に最も忠実な理性的言語であるという点ではデイドロと一致する。けれども、ボーゼは倒置法さらには比喩(figure)一般の起源に対して、デイドロとは正反対の見解をもっていた。ボーゼによれば、

「倒置法は始源の時代の片言の残存であるところか、反対に、言語の誕生からずっと後の時代の弁論術の最初の試み」(Langue, in *Encyclopedie*, t. 9: 265)なのである。つまり、始源の言語は、倒置法をつかわず分析秩序に忠実な言語であったのであり、倒置法は、時代がくだるにつれて、情念と想像力によって人間が意図的につくりだしたものだということになる。

デイドロが理性的秩序にもとづく「制度的構文」と呼ぶものは、ボーゼのいう「分析秩序(ordre analytique)」とはほぼなじ語順で構成されている。ところがボーゼは、デイドロがコンディヤックの発生論的アプローチを基礎にして、制度的構文がある歴史的段階になつてはじめて形成されたこととらえたことを批判するのである。ボーゼにとつて分析秩序とは、言語が用いられるかぎり存在しなければならぬ了解性の基礎であり、それは歴史的形物ではない。分析秩序は「自然の真正の秩序であり、あらゆる慣用の変異と技術の発明より以前に存在するもの」なのである。つまり、言語はデュマルセのいうように「本能と感情の形而上学」によってつくられたのではなく、はじめから理性的な「分析秩序」にもとづいてい

たというのである。いいかえれば、ポーゼのいう「分析秩序」は、後から文法学者が引き出した規則なのではなく、(チヨムスキーのいう「普遍文法」がそうであるように)精神のなかに実在する実体なのである。

デュマルセとポーゼのこのような立場のちがいは、言語における「慣用(usage)」の役割のとらえかたにも反映している。デュマルセは、構文のカテゴリを分類する際に、単純構文と比喩的構文にくわえて、単純構文ではないが個別言語の慣用が正当と認めた構文として「慣用構文(construction usuelle)」という分類を加えた(Du Marsais, t. 3: 36-39)。おそらくデュマルセには、合理的基準によって歴史的言語の慣用を裁断することにとためらいがあったのである。ところがポーゼにとって、このような「慣用構文」という概念は必要なかった。慣用にしたがっていいまいが、分析秩序にしたがっていいない構文はすべて「比喩的構文」なのである。つまり、そのときは個別言語の慣用そのものが比喩から成り立っていることになる。比喩とは言語の「本来的状態」からの偏差であるとされたが、ポーゼにとって言語の「本来的状態」は個別言語の慣用ではなく、あくまで

普遍的理性にもとづく分析秩序のもとにのみ見出されるものであった。

(2) 言語教育における〈routine〉と〈raison〉

啓蒙主義の言語論において〈教育〉の主題系はきわめて重要であった。こどもから大人への成長は〈自然〉から〈文明〉への進歩と類比的にとらえられたため、個体が系統発生を反復するように、教育は言語の歴史的形過程を模倣すべきであると考えられたのである。

デュマルセは〈主語—動詞—目的語〉という単純構文(construction simple)があらゆる言語の理解の基礎となるものと考え、この認識を言語教育に反映させようとして、『ラテン語学習の合理的方法』を著わした。こうして、まずラテン語の原文をまず単純構文に変形し、つぎにラテン語の単語をフランス語の単語に置き換え、最後にフランス語の語順にととのえるという教育法が生まれた。これをデュマルセは「分析方法(methode analytique)」と名づけた。しかしデュマルセは、この「分析方法」をさまざま生徒にほどこそうとはしなかった。デュマルセは言語教育に〈routine〉と〈raison〉というふたつの段階を設定した。〈routine〉においては、原

文の文法的説明をいっさいおこなわず、ラテン語の文の単語のひとつひとつの意味がしめされるだけである。こうしてラテン語の経験を積むことで、生徒はラテン語がフランス語といかにことなる規則をもつ言語であるかを実感として理解するようになる。この段階が十分達成されたのちに、〈raison〉の段階がおとずれる。この〈raison〉の段階においてはじめて分析方法がラテン語に適用されて文法的説明がおこなわれる。つまり、〈routine〉においては直感で把握したものを〈raison〉においては理論で説明するのである。デュマルセは、「ロックの経験論的教育理論にしたがって、十分な実践 (pratique) を積み重ねた後に、はじめて理論 (theorie) をあたえることができる」と考えたといえよう。(Du Marsais t. 1: 25-27)

ポーゼは、デュマルセが〈raison〉の段階でしめす教育法については意見をおなじくする。ポーゼにとってそれはまさに一般文法を教えることにはかならなかった。ところが、ポーゼはデュマルセのいう〈routine〉の部分は不要であり、教育ははじめから〈raison〉の段階から始めるべきだというのである。デュマルセは、こど

もの理性は最初から分析方法の推理についていくほど発達していないと考えたが、ポーゼによれば、こどもが母語の非合理的慣用をつうじて知っているものだけで、最初から〈raison〉の段階に入る準備ができていたというのである。デュマルセのように、母語に加えて、生徒をラテン語の非合理的慣用のなかに入り込ませるのは、「かれらの精神を理性なしに (sans raison) 進ませるように習慣づける」ことにしかならない。ポーゼは「すぐれた文章の理性的でない説明は精神を退化させるだけだ」とまで言うのである (Méthode, in *Encyclopédie*, t. 10: 457-8)。

ポーゼは、実践を軽視するわけではなく、実践をつうじて理論は堅固なものとなるという点を確認してはいる。しかし、このことは実践のなかから理論を見出していくことを意味しなかった。ポーゼは、出発点をはっきりと認識して一般的なものから個別的事例に降りていくほうが、個別的事例から到達点もわからないままむなしく一般的なものにさかのぼるよりもはるかに効果的だというのである。

このような認識は具体的な教育方法の問題をこえて、

ボーゼの一般文法の理論的位置づけをあきらかにしている。後に述べるように、一般文法の規則は個別文法に先立って存在するのであり、慣用の事実のなかに降りていくのは、ただ一般文法の原理の確認とその適用のためだけなのである。

(c) 命題 (proposition) と言表作用 (enonciation)

デュマルセは、文はすなわち命題であり、命題は思考の像であると考えたが、すべての命題が判断 (Judgement) を表すわけではないとした。判断とは、対象がある客観的状态にあることを肯定あるいは否定することからなり、こうした文については真偽の検証が可能である。典型的には、判断は直接法で言い表される。しかし、たとえば、「Soyez sage」と言った場合、この文はあなたが賢いか賢くないかを言い表わしているのではなく、あなたが賢くあれという願望を言い表わしている。また、ほかにも命令、条件づけ、依頼などを表わす文もそうである。これらの文は、対象の記述をしているのではなく、対象について「精神のある種の見方を言い表す」(Dro Marsais, t. 3:43) ののであり、「直接法以外の法を用いて言い表される。デュマルセはこうした文を判断と区別

して、「言表作用 (enonciation)」と名づけた。ただし、判断と言表作用とのちがいは、構文の統辞関係にあるわけではなく、精神と客体との関係のちがいであるとされる。(こうした把握は、オースティンによる事実確認文と行為遂行文の区別を思い起こさせる。)

ボーゼは、こうしたデュマルセの見解を批判する。ボーゼは、デュマルセのいう判断と言表作用はおなじものであるという。ボーゼによれば、言語の本質的な目的は他者に自己の認識を伝達することである。そして、「われわれの認識は、これこれの形態のこれこれの関係のもとで、存在の叡知的現存 (existence intellectuelle) を知覚することにほかならない」。この認識は、「主語と述語から成る判断をつくりだす。そして、命題が主語と述語からなる論理のカテゴリーにしたがうなら、それはなんであれ判断を言い表している。存在の叡知的現存が、われわれの精神のなかにそれ自体で存在するなら、その認識は真となり、そうでないときは偽となるが、「真であれ偽であれ、この認識が判断であり、この判断の表現が命題である」(Proposition, in *Encyclopédie*, t. 13:471)。

つまりボーゼは、主体が経験のなかではたらかせる「精神の見方」という要素を完全に排除し、あらゆる文||命題の本質を、対象についての知的認識の表現へと還元したのである。そして、ボーゼにおいては、対象の「知的現存」に対応するものが、言語そのものの「知的現存」であり、それをあつかうのが一般文法の理論なのである。

3 ボーゼの一般文法理論

ボーゼの一般文法の理論は、デュマルセの理論をさらに精密にしたものといってよいのだが、デュマルセのなかにあった経験論的要素ははっきりと切り捨てられ、合理論的方向づけが徹底されることが、うえのことからもわかる。

それではボーゼの一般文法の理論的枠組みはどのようなものだろうか。

精神の一回の行為の所産としての思考 (*une pensée*) は「純粹に知的で、必然的に不可分である」。この思考の全体が、抽象作用 (*abstraction*) によって、思考の要素としての諸観念と、それら諸観念の間の相互の関

係へと分析される。そして、観念相互の関係は、その項 (*termes*) の間に定まった秩序をもっている。そして、ボーゼはつぎのように論じる。

「先行性 (*priorité*) は、先立つ項に固有のものであり、後置性 (*posteriorité*) はそれに後続する項に本質的である。ここから、同一の思考のさまざまな部分観念のあいだには、諸観念のすべてが思考に対してもつ関係 (*rapport*) から生まれ、観念相互の諸関連 (*relations*) にもとづくなんらかの継起性 (*succession*) があることになる。……わたしはこの継起性に分析秩序 (*ordre analytique*) という名前をあたえる。なぜなら、いかなる言語において言い表されるにせよ、それは思考の分析の結果であると同時に、言説の分析の基礎であるのだから。」 (*Langue, in Encyclopédie, t. 9: 257*)

典型的な分析秩序は、〈主語—動詞—目的語〉という構文である。主語が動詞に先行し、動詞が目的語に先行するのが、それぞれの項の固有性だからである。

思考はそれ自体では単一不可分の知的性のもとにあるが、継起性をもった言説が「思考の可感的な像」 (*ibid.*) となることによって、思考は伝達可能なものと

なる。しかし、この像は原型である思考の秩序を忠実に言い表さねばならない。それを可能にするのが分析秩序である。なぜなら、この分析秩序だけが、「つぎつぎと生まれては消え去っていくこの「ことばという」像の秩序と均衡を規制することができる」(ibid.)からである。つまり、現実には発音されると同時に消滅することばを、精神の了解性につなぎとめるのが分析秩序の役割である。

そして、この分析秩序の原理は「人間精神の本性(nature)と同様に不変であり」「あらゆる言語への影響は必然的であり普遍的である」(ibid.)。この分析秩序という「原型的で不変のプロトタイプ」がなければ、ことなる世代やことなる地域のひとびと、さらには個々の人間どうしのあいだでさえ、言語による思考の伝達が不可能になってしまう。「したがって、分析秩序は、あらゆる言語の伝達可能性(communicability)と、社会の魂である思考の交流(commerce)の普遍的きずななのである」(ibid.)。

しかし、言語のあらゆる要素が分析秩序に還元しうるわけではない。おのおのの言語は、「理性」に還元できない固有の「慣用(usage)」によっても成り立っている。

こうしてボーゼは、言語が普遍的理性と相対的慣用のふたつの原理によって支配されているものと見た。ただし、言説の了解性と伝達性はつねに分析秩序によって基礎づけられなければならない以上、慣用は言語にとつてあくまで二次的・付随的な要因にとどまる。そして、このふたつの領域に対応してふたつの文法が存在する。それが一般文法(grammar générale)と個別文法(grammar particulière)である。

一般文法は思弁(speculation)によって言語の普遍的原理をあつかう科学(science)であるが、個別文法はその普遍的原理を個々の言語の恣意的慣用に応用することからなる技艺(art)である。ボーゼは、このちがいを際立たせてつぎのように論じている。

一般文法の原理はあらゆる言語に先立って存在する。「なぜなら、その原理は諸言語の可能性(possibilité)のみを想定しているからであり、知的活動において人間理性を導く原理とおなじものであるからであり、一言でいえば、永遠の真理の原理であるからである」。それに対して、個別文法は言語の後に来る。なぜなら、個別文法はすでに存在する諸言語の慣用を観察した結果でしか

ありえないからである。(Beauzée: X-XI)

したがって、一般文法と個別文法の真理性の基準はこ
となるレベルにある。一般文法は、個別言語の慣用から
抽象されるのではなく、それらの慣用とは独立に存在し、
その上位に立つ普遍的原理を対象とする。その一方、個
別言語の慣用は、つねに一般文法の原理に忠実にしたが
うわけではない。慣用を成り立たせている「固有語法
(idiosyncrasy)」は、けっして普遍的原理には還元できな
いからである。したがって、個別文法が対象とする現実
の慣用のなかに、一般文法の原理に合致しない点があっ
ても、一般文法の原理が誤っているわけではない。一般
文法は「思考の本性」という「不変の真理」にもとづい
ているのに対し、個別文法は「偶然的で恣意的で変わり
やすい慣習に依存する仮定的真理」だけをあつかうから
である。(ibid: IX)

こうしてポーゼは、一般文法と個別文法のそれぞれの
対象と領域を明確に画定するのであるが、このふたつの
種類の文法は、科学は技芸のあたえる事実を観察し、技
芸は科学のあたえる原理を適用するという相互依存の関
係にあるという。ポーゼによれば、これはニュートンが

とった実験と観察による自然法則の追究の方法とまったくおなじだという。ポーゼは『一般文法』の序文でこう
いっている。

「したがって、わたしはさまざまな言語の慣用を文法
的現象として見たのであり、それらを観察することは、
文法の原理の体系の基礎として役立つはずであった。わ
たしはあらゆる種類の文法を調べてみた。ヘブライ語、
シリア語、カルデア語、ギリシア語、ラテン語、フラン
ス語、イタリア語、スペイン語、バスク語、アイルラン
ド語、英語、ゴール語、ドイツ語、スウェーデン語、ラ
ップ語、中国語、ペルー語。そこにたまさか見出さ
れる光ある道をあきらめずに、わたしはそこに原理より
も事実をさがしもとめたのである。」(ibid: XV)

ここでポーゼは完全に帰納的方法にしているよ
うに見える。けれども、ポーゼにとって、一般文法の原
理が理性の普遍的秩序にもとづかねばならないというこ
とは、自明の公理であると同時に、けっして放棄しえな
い理論的要請であった。したがって、ポーゼが事実の森
のなかで迷うことがなかったのは、はじめから一般原理
の存在を確信していたからなのである。事実、つづけて

ポーゼはこういつている。

「この方法にしたがうことにより、わたしはあらゆるところに同一の眺め、同一の一般原理、言語活動に共通する法則における同一の普遍性を見出した。諸言語のちがいや固有語法 (idiosme) は、一般原理のことなる側面、あるいは共通の基本法則のことなる適用にすぎないということがわかったのである。……したがって、地上のあらゆる民族は、ことば (idiomes) の多様性にもかかわらず、絶対に、同一の言語 (Langage) を不規則も例外もなく話しているのであり、言語の必要要素 (Éléments nécessaires du Langage) は、まったく少数のものに還元できるのである。」(ibid.: XVI)

ポーゼによれば、一般文法は言語の可能性のみをあつかう。個別文法は、一般文法が提示する可能性のうちの一つかを選択して、個々の言語のなかで現実化する。つまり、一般文法は、けっして個々の言語の文法規則から抽象されるべきものではない。過去の言語であれ、いま話されている言語であれ、いまだ未知の言語であれ、言語が言語であるかぎりもたねばならない必要条件の総体が、一般文法を構成することになる。

ポーゼは、この「言語の必要要素」を三つのカテゴリーに分けている。第一は「音声要素 (Éléments de la parole)」第二は「品詞要素 (Éléments de l'oraison)」第三は「統辞要素 (Éléments de la syntaxe)」である。現在の用語でいうなら、それぞれ音韻論、形態論、統辞論の分野がそれにあたる。

ポーゼは、第二の「品詞要素」と第三の「統辞要素」は、個々の言語の規則から引き出されるのではなく、前もって精神のなかに配置づけられていると主張する。しかも個々の言語は、これら精神のなかにある要素を基礎にしてみずからの規則をつくったのであり、けっしてその逆ではないのだと、こう (Inversion, in *Encyclopédie*, 78: 886)。だからこそポーゼは、始源の言語は分析秩序に忠実にしたがっていたのであり、比喩と倒置法はのちに人間の恣意によってもちこまれた技術だと考えることができたのである。

それでは、その言語の一般原理とやらは、どのようにして成立したのだろうか。あらゆる歴史的事実在先立ち、それら事実の成立の根拠となる原理が、歴史のなかで成立したと考えることはできない。ここでポーゼは、どう

しても言語の起源にたいする一定の答えを提出せざるをえなくなったのである。

4 一般文法と言語神授説

ボーゼは、「言語の起源と段階的發展を証明するため
に野生人 (*homme sauvage*) の仮定を認める」(*Lan-
gue, in Encyclopédie, t. 9: 250*) 論者たちを徹底的に批
判する。とくに名前をあげてはいないが、ここでボーゼ
が念頭においているのは、言語が「自然状態」のなかか
ら自然的記号として発生し、しだいに制度的記号へと発
展したととらえるコンディヤックの理論である。そして
ここで、ボーゼはルソーが『人間不平等起源論』のなか
でしめした見解を論駁のためにひきあいに出すのである。
もちろん、言語の発生を自然状態から説きおこそうとす
るルソーは、ボーゼにとって批判的となることにはか
わりがない。けれども、『人間不平等起源論』のなかで
ルソーが解決不可能だとして投げ出したいくつかのアポ
リアは、ボーゼが自説の正しさを証明するための論拠と
なりえたのである。

そこでルソーが提出したアポリアは、つぎの三つにま

とめられる。

第一は、真の自然状態から言語が発生する必然性がど
うしても説明できないという点である。ルソーは、コン
ディヤックが言語の形成を説明するにあたって、すでに
社会の存在を暗黙の前提としていることを批判した。と
ころがそうなると、自然状態では意志の疎通がおこなわ
れず、また、その必要性も感じられないのだから、そこ
からどうして言語が必要とされたかが説明できなくなる
というのである。

第二は、言語と思考の循環性である。「人間が考える
ことを学ぶためには言語が必要であったとすれば、言語
の技術を見出すためには、考える術を心得ることがさら
に必要」(*Rousseau: 43*) であることになり、この循環
からはどうしてもぬけだすことができない。

第三は、言語と社会の循環性である。「言語の制定に
とってすでに結合した社会が必要なのか、それとも社会
の成立にとってすでに発明された言語が必要なのかとい
う、この困難な問題」(*ibid.*: 47) は、第二のものとお
なじくらい解決不可能な問いなのである。

そこでルソーは「言語が純粹に人間的な手段によって

生まれ確立されなかつたということがほぼ証明されたと確信し」(ibid.)、議論を先に進めるのである。

ボーゼは、ルソーが指摘したようなアポリアが生ずるのは、言語が自然状態から段階的に形成されてきたという仮説自体が誤りであるからだという。ボーゼはつぎのように論じている。

「もし最初の言語と最初の社会というものを、人間的な経路によって根拠づけようとすることに固執するならば、世界の永続性と人類の世代の永続性を認めざるをえなくなる。したがって、本来の意味での最初の社会や最初の言語などという考えはあきらめるほかない。……人間が話すことなく存在しはじめたのなら、人間はけっしてその後で話すことはないだろう。」(Langue, in *Encyclopedie*, t. 9: 252)

つまりボーゼは、たとえコンディヤックやルソーのいうような人間の自然状態というものが存在したとしても、そこからけっして言語が生まれることはないと言うのである。(ボーゼはここで聾啞者と野生児の例をひきあいに出すのだが、この点については糟谷(1996)を見よ。)

人間が存在するかぎり、人間は言語を話していた。言

語はけっして人間の意志によって発明されたものではない。とすると、いったい言語はどのようにして生まれたのだろうか。ボーゼの答えはこうである。

「野生人の仮説は、創成記の正統的な歴史によって反駁されるが、それだけでなく、最初の言語を形成するための妥当な手段をならあたえてくれない。最初の言語を自然的(naturelle)と想定することは、自然というものの恒常的で統一的なありかたとも相容れないもうひとつの考えである。したがって、神みずからが、最初の二人の人間にかけがえない話す能力をあたえただけでは満足せず、生まれたばかりの社会の要求に必要な語とて言いまわしを考えだす欲望と技術をかれらに直接ふきこむことによって、話す能力をすぐさま十全に開花させたのである。」(ibid.: 253)

つまり、一般文法の基礎となる言語の一般原理と普遍的要素は、神があたえたものなのである。しかし、それでも疑問がおこる。最初の言語が理性の普遍的秩序にもとづくものであったとするなら、どうして地上にはこれほど多様な言語が存在するのだろうか。

ここでもやはりボーゼは神授説に助けをもとめる。原

初の言語が分裂し多様化したのも、言語の誕生とおなじく、神の力の介入によったとするのである。言語の歴史的变化はけっして不連続ではなく、つねに漸進的にしらずしらずのうちに生じるので、理解の断絶は生じえない。したがって、相互理解が不可能なほど言語を多様にしたのは、漸進的に生じる自然的变化ではなく、神の奇跡によるものとしか考えられないというのである。ポーゼはこう述べている。

「もし言語の分裂が前日に知らず知らずのうちに起こっていたのなら、次の日もそうでありつづけるだろう。もしそれまでの変化の進行にもはやもとづかない異常な激変 (revolution) が次の日に起こるならば、それまでの変化がこの激変の原因であるとはけっしてみなせないだろう。したがって、この激変はその原因においても結果においても突然のものであり、奇跡によるものと見なければならぬ。……それゆえ、奇跡でしかありえない出来事を、自然的な原因によって説明するのは、はなはだしいあやまりである。」(Ibid.: 255)

これがポーゼの言語神授説である。つまり、言語の創造も言語の分裂も、ひとえに神の力の介入によるという

のである。しかし、このような神授説は、ポーゼの一般文法の理論とどのように接続しているのだろうか。

5 一般文法における神と自然

ジュリヤードは、ポーゼがこのような神授説をとったのは、当時の検閲を配慮したからではないかと述べている (Juliard: 289)。しかし、はたしてそうだろうか。

ポーゼの主張する言語神授説は、たとえ聖書によって補強されているとしても、なんらかの宗教的教義にささえられていたわけではない。むしろ、それは宗教的意味を完全にはぎとられた神授説なのである。

ポーゼの議論を読むと、わたしにはパスカルがデカルトについて言ったつぎのことばが思い浮かんでくる。「私はデカルトを許すことができない。彼はその全哲学のなかで、できれば神なしに済ませたいと思った。だが、彼は世界に運動を与えるために、神に最初のひと弾きをさせないわけにかなかった。それがすめば、もはや彼は神を必要としない。」(『パンセ』ブランシュビック版断章七七、松浪信三郎訳)

デカルトの神がこのとおりであったかどうかは何とも

いえない。しかし、ポーゼの神は、まさにパスカルが批判したような神概念であったのではなからうか。

ポーゼの神が「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」でないことはもちろんである。かといって、神が奇跡をおこすことを認めているのだから、完全に理神論的な「制作者としての神」であるとも言切れないところがある。とはいえ、その奇跡とは、たんに言語の創造と分裂のきっかけをあたえる「最初のひと弾き」にすぎない。このような神の曖昧な位置づけは、つぎのポーゼのことは聞けばますますはつきりする。

「神は原初の言語のなかに、突然、変化をもたらしたのだが、その変化は、この後つづいて人間がみずから移動することによって、地上のさまざまな地域に群れをなして分散したときに、自然的原因が引き起こした変化とおなじものである。なぜなら、自然的秩序の埒外にあるできごとにおいてさえも、神は自然 (nature) にさからわず、すべての自然の原型である永遠で不易の觀念に逆らつてゐるまゝはしなからである。」(Langue, in *Encyclopédie*, t. 9 : 256)

じつは、ポーゼにとつて、「自然」は「神」よりも上

位にある概念であつた。いかに神の奇跡といえども、「自然」の斉一性と理性的秩序をけつしてゆるがすことはできない。しかし、ポーゼが必要とした言語と精神の「自然」は、コンディヤックが考えたような進歩も生成もこうむらず、時間の侵食がまったくおよばない不変の同一性をつくる秩序でなければならなかつた。ところが、この自然の秩序の存在自体を可能にする要因は、所与である自然の内部には措定できない。なんらかの自然の外部の力が一度は必要だつたのである。これがポーゼにとつての神授説の意味である。つまり神授説は、一般文法の根拠をあたえるものでありながら、一般文法の理論そのものによつては答えることのできない問題を解決するために、方法的要請として後から付け加えられた前提なのである。

ポーゼが神授説をとらざるをえなかつたのは、ポーゼがコンディヤックのような自然的アプローチを拒みながら、超越的理性と歴史的現象という次元のこととなる秩序のあいだに一貫性を打ち立てようとしたからである。

しかし、このことを逆の面から見れば、神授説は言語の「起源」そのものを問題系から放逐するための理論装置

だったということもいえる。なぜなら、あらゆる言語が普遍的原理をもつがゆえに一般文法の対象となりうるるとすれば、神授説をとることによって、その普遍性自体がいかにして形成されたのかを問う必要がなくなるからである。こうして、言語の普遍的原理それ自体を所与の対象としてみちびきだすことは、ある意味で言語を自然科学的分類学の対象とみなすことを意味する。言語の起源の問題に決着をつけつつ、言語の普遍性の所与性を保証すること、ボーゼの神授説の主張のもくろみはこの一点にかかっていたのである。

チョムスキーの普遍文法の理論は、言語能力が生得的なものであるという認識にささえられているが、この結びつきはボーゼの一般文法と神授説とおなじ関係にあるのではないだろうか。生得説が言語神授説の変形だというのではない。問題はそれらが理論にたいしてはたらしめる役割にある。

チョムスキーは言語学は心理学の一部であり、究極的には脳のなかの認知システムの研究という意味での自然科学的生物学に解消されるはずだとたびたび強調している。つまり、チョムスキーは、言語を脳のなかで物理的

に生じる心理過程へと還元しようとしているのである。しかし、このように心理過程と物理過程を問題にするならば、言語は事物の因果関係の無限の遡行のなかに投げられるはずである。ところが、チョムスキーは生得説をとることによって、その無限の遡行を回避することができたのである。

チョムスキーの理論が説明するのは、言語に随伴して生じる脳のなかの心理的・物理的過程である。たしかにそれは言語という現象の心理的・物理的原因をつくるかもしれない。しかし、現象の原因は、その現象がなぜ当のそのものとして成立するかを説明しない。たとえば数を数える、音楽を聞くあるいは演奏するとき脳のかで何がおこっているかを調べることはできるだろうが、それは数学と音楽の本質とは無関係であろう。言語も同じではなからうか。たとえチョムスキーの理論がすべて正しいとしても、それは言語そのものへの問いかけに対する答えではない。言語が言語としていかにして成立しているのかという問いは、空白のままにのこされるのである。

チョムスキーの生得説は、ボーゼの神授説と同様に、

言語の根拠を言語以外のものによって説明しようとする者がかならずおちいってしまう陥穽なのではないだろうか。しかし、そうかといつて、カツツのように、チョムスキーの心理主義を批判するあまり、言語をプラトニズム的な抽象的実体とみなしてしまふなら、もうひとつの陥穽におちいることになるだろう (Katz 1981)。

人間にとって言語はつきせぬ謎でありつづける。言語の根拠は言語自体のなかにしかないというおそるべき逆説にふみとどまるためには、'もしかすると人間にとってきわめてむずかしい強靱な精神の態度を必要とするのか'もしれない。

参考文献

- Aarsleff, H. 1982: *From Locke to Saussure. Essay on the Study of Language and Intellectual History*, Minneapolis, University of Minnesota Press.
- Auroux, S. (ed.) 1973, *L'Encyclopédie "Grammaire" et "Langue" au XVIIIe siècle*, Paris, Mame.
- Id. 1979: *La sémantique des encyclopédistes*, Paris, Payot.
- Beauzée N. 1974: *Grammaire générale*. 2 vols., Stuttgart.

Bad Canstatt, Friedrich Fromann.

Chomsky, N. 1976: 『チャルト派言語学』川本茂雄訳、みすず書房。

Id. 1986: *Knowledge of Language*, New York, Praegae.

Id. 1989: 『言語と知識——ベトナム講義録(言語学編)』田窪行則・郡司隆男訳、産業図書。

Diderot, D. 1967: Lettre sur les sourds et muets, in *Oeuvres complètes*, t. 2, Paris, Le Club français, pp. 513-68.

Du Marsais, C. Ch. 1971: *Oeuvres choisies*, 3 vols., Stuttgart-Bad Canstatt, Friedrich Fromann.

Encyclopédie ou Dictionnaire raisonnée des sciences, des arts et des métiers, 17 vols., 1751-1772.

糟谷啓介 1996, 「起源の他者——啓蒙時代の野生児とつづあ者」『現代思想』第24巻第5号、青土社、pp. 382-97。

Juliard, P. 1970: *Philosophies of Language in Eighteenth-Century France*, The Hague, Mouton.

Katz, J. 1981: *Language and Other Abstract Objects*, Oxford, Blackwell.

Rousseau, J. J. 1986: 『人間不平等起源論／言語起源論』(ハンター選集の)原好男・竹内成明訳、白水社。

田中克彦 1990: 『チョムスキー』岩波同時代ライブラリー、岩波書店。

(一橋大学大学院言語社会研究科教授)